

Q&A 地域アカデミア 2025Web 講座「鎌倉研究における考古学の役割」

受講生からの質問に対しては、事務局で取りまとめた上、受講生のみがアクセスできる本 HP「資料室」上で共有できるようにします。
今回の講義内で受講生から以下の質問が寄せられましたので、講師の先生からのご回答を掲載いたします。なお、内容は随時更新されます。

(2025. 11. 12)

Q1 :

建長寺の遺跡調査で、四半敷が出て来たとお話がありましたが、どのような建物のものであったのでしょうか。

A1 :

建長寺の発掘で出土した四半敷きは、「法堂（はつとう）」という建物に使用されておりました。

講座内でお示した鎌倉時代の指図にも描かれ、位置、構造ともに合致しております。

鎌倉時代の中頃に鎌倉へと伝わった宋風伽藍（禅宗様伽藍）では、三門・仏殿・法堂といった主要建築が一直線に並ぶよう配置されますが、法堂は仏殿の後方に設置され、住持（住職）が修行僧などに説法（演説）をする場所として使用されます。

また四半敷きは、磚（せん）と呼ばれるレンガを敷いた床のことで、これが使用されているということは、その建物が靴のまま入室する構造であったことを示しています。

靴を脱いで入室する日本式の建物構造ではなく、中国の寺院のルールをそのまま日本でも再現していることがわかります。

法堂を「はつとう」と発音するのも、当時の中国語をそのまま用いているためです。

建長寺の四半敷きは磚ではなく、鎌倉で産出される凝灰岩（鎌倉石）を使用していることが発掘調査で明らかになりました。

磚を使わなかった理由など新たな疑問も出てくるのが発掘調査の醍醐味であり、これらを明らかにしていくことで当時の様相をより史実に近いかたちで描き出すことができます。

(2025. 11. 12)

Q2 :

京都や奈良では、街中でも発掘調査が行われていますが、鎌倉に比べて学術調査の比率が高いのでしょうか。

A2 :

京都・奈良・鎌倉の学術調査のすべてのデータが手元にあるわけではないので比率を明確に示すことはできませんが、3都市で学術調査が飛びぬけて多いのは奈良になります。

鎌倉市には公的な埋蔵文化財調査に特化した組織が無く、市文化財課が直接調査を行っておりますが、奈良市には市の埋蔵文化財センターとは別で、奈良文化財研究所（独立行政法人国立文化財機構）という国立の研究機関が存在します。

組織下には市とは別の埋蔵文化財センターのほか、都城発掘調査部があり、平城京担当、飛鳥・藤原京担当と部署を分けて、定期的な学術調査と史跡整備のための研究を進めています。

一方で京都市は公的な埋蔵文化財調査機関を有しておりますが、学術調査は多くはないようです。これは鎌倉市にも同じことが言えますが、住宅がひしめいている現代の街なかで、学術調査を行うための調査範囲を確保するのが難しいという問題があります。

この点で奈良市は、平城京跡の広大な範囲（JR奈良駅前）が田畑をとして残り、その後地元住民によって開発を回避してきた歴史があり、現在は国営公園として整備するためさらに公地としての買い取りが進められるなか、学術調査が実施されております。

やはり学術調査には市民の理解とともに国の補助が必要で、市の予算だけでは立ち行かないという実情があります。